

## ビッグファーマ —製薬会社の真実

マーシャ・エンジェル 著

内潟 安子(東京女子医科大学糖尿病センター)

吉岡成人先生編集の「糖尿病療養指導士のための糖尿病外来ケア・チェックシート」という新しい本が2月に医学書院から出版された。余白も多くとってあり、手に取って早速ばらめくってみようという気になる。章と章の間に、吉岡先生のちょっとした思いが「CDE ガーデン」というコーナーとして載っている。これがまたおもしろい。

そのなかに、「糖尿病診療はメーカー主導？」というのがあった。イミシンなことが書かれてある。

本書は2004年に米国で出版された。著者はNew England Journal of Medicineの前編集長で、Time誌は氏をアメリカの最も影響力のある25人の1人として選んでいる。つまり全米の影響力あるオピニオンリーダーの1人であるという。

氏はこの本で何を伝えたかったかというと、製薬業界という本来は役に立つ薬をつくり出すという高い志を持っているはずの業界が、この20年間で、その志とかけ離れたことをするようになってしまったことをなげき、このことを明らかにしたいということである。今では価値の疑わしい薬を売りつけるためのマーケティングマシンと化してしまったのではないかという。

ビッグファーマとは、巨大製薬会社のこと。製薬会社の本来の仕事は創薬である。しかし、今はどうだろう、ビッグファーマとして画期的新薬を創っているであろうか。

たしかに画期的な薬は作られている。なるほど素晴らしい、目からうろこのような新薬がある。それがあるがゆえに新しい治療が飛躍的に進み、患者の福音になっている薬はある。対象者がとても少ないながらも画期的な薬を提供してくれている会社はたしかにある。

しかし、多くのメーカーは、創薬を公の機関頼み(NIHをはじめとして)にし、そのライセンスを取得することを創薬と勘違いし、大規模研究を行うのであるがプラセボと比較するだけで既存の薬とは比較しない(臨床試験の企画が製薬会社主導であることも問題ではないか)、独占的販売権を死守しようとするためにゾロ商品(それでもアメリカのゾロ品の評価は厳しい、日本はとても甘い。これも問題)の販売を阻止し、この阻止活動のために多くのロビイストを雇い政府に圧力をかける。これらにかかった費用は薬価として消費者に向けられ、とくに米国の薬価はとても高く、カナダから薬を購入する米国人。いまや医学教育にまで口出しするビッグファーマ。

医療とは何なのだ。われわれは真の医療をしているのか。M

● A5 頁 335 2005 年

定価 2,415 円(本体 2,300 円 + 税 5%)

[ISBN 4-884-12262-3] 篠原出版新社